

# 概 要 報 告

実施期日	8月3日(木)
部 会 名	中学校 外国語部会

## 神奈川県研究主題

「個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫」

## テーマ

### 『ポートフォリオ式プチラウンドシステムの導入』

## 提案概要

「完全習得学習の考えに基づき、反復学習に取り組ませることで、語彙や表現、文法のインプットを十分に行う。インプットを十分に行った後に、アウトプットの活動に取り組むことで、より主体的に取り組む、深い学びを得られることができる。また、生徒が達成すべきタスクをあらかじめ生徒に提示し、授業中にそのタスクに取り組む時間を設定することで、それぞれの生徒自らが学習を調整しながら取り組むことができる。」と仮説を立て、実践を進めた。

## 【実践内容】

1つ目は自由進度学習である。年度初めや定期テスト後の最初の授業で個人ポートフォリオの配布をし、授業中の15分～20分で自由進度学習を行う。個人ポートフォリオには次の定期テストまでに達成すべきタスクを具体的に提示してある。自由進度学習の実践内容について、単語学習サイト「Quizlet」、ゲームサイト「Kahoot!」を活用し、ゲーム形式で語彙学習を行う。これらのサイトを用いて、反復練習・前倒し学習をすることができる。

2つ目は「スピーキング力の向上」である。デジタル教科書を活用した音読練習・本文暗唱の実践を行う。この活動をする意義は、第1に「スピーキング力の向上」である。音読や暗唱を通じて、発音、イントネーション、語彙、文法を同時に自然な流れで学習させることができる。第2に「リスニング力の向上」である。同じ音声を繰り返し聞くことを継続することで、自然とリスニング力向上に繋がる。

3つ目はプチラウンドシステムの導入である。前身は横浜市立南高等学校附属中学校で生まれた1年間で教科書を4～5回繰り返し学ばせる5ラウンドシステムという指導方法だが、提案者が実践している指導方法は個人ポートフォリオで提示している定期テストまでの範囲を5回以上繰り返して学ばすというものである。主に前半は英単語の発音練習から教科書のリスニング、読み練習になるが、後半では暗唱や教科書のリーディング教材を利用したアウトプット活動を行う。

4つ目はTTやALTの活用である。自由進度学習の時間にT2の先生やALTに個人ポートフォリオの課題を見せるようにさせ、T1の授業者はスローラーナーの支援にあたるというものである。

## 【成果】

- ・インプットとアウトプットの質の向上
- ・主体的に学習に取り組む生徒の増加

## 【課題】

- ・オンラインでの学習のため事前準備の大変さ
- ・マンパワーの不足によるスローラーナーの援助が不十分

## 質疑応答

Q 自由進度学習を行う上で、提案者自身は授業の中でどのような声掛けを行ってきたのですか。

A 特別な声掛けは行っていません。子どもたち自身がポートフォリオに基づいて学習することができます。ただ、授業の中でタスクを達成するための学習ではなく、あくまでもポートフォリオに記載されているものは、英語を学習する上での1つの学習方法であると伝えています。

Q 自由進度学習の評価はどのようなものになっていますか。

A ポートフォリオは成績に入れていません。しかし、ポートフォリオ内のタスクに基づいた小テストや実技テストを行っています。アウトプット学習についても、ポートフォリオ内の学習とは別に評価を行っています。

Q ポートフォリオを作成したことによって生徒にどのような変化がありましたか。

A まだ変化が現れ切れていない部分が多いが、自由進度学習の時間を楽しみにしている生徒も多く、「今日はどのくらい時間を取りますか。」と尋ねてくるなど、積極的に取り組んでいる生徒が多いと感じます。また全体として、粘り強く取り組むことができるようになった生徒も増えたような気がします。

## 協議の柱及び協議概要

・「先生方が実践されている「個別最適な学び」「協働的な学び」の工夫」

今回の提案では「個別最適な学び」ということに重きを置いていたが、評価の部分では難しいという意見と、授業者の事前準備が負担になってしまうのではないかという意見がでた。たしかに個人ポートフォリオは個別学習という点ではかなり最適ではある。しかしその反面、生徒の学習進度に差が出てしまうのも事実である。毎時間T2やALTが授業に入れるわけではなく、T1のみの机間指導だけではマンパワーの不足である。また授業内で生徒の主体的に学習に取り組む態度を評価しなければならないのに個人ポートフォリオは評価せず、もし生徒自身の取り組みがなかったらどのように評価をしていけば良いのかという意見が出た。

## まとめ概要

提案者は最後に、「『Teaching』から『Coaching』へ」という展望を述べた。これからの社会では自立が求められ、自立をして学べるようになるためには授業者がどのように課題に取り組んでいくべきかを「Coaching」し、子ども達自身が考え、行動させていく必要があると感じていた。

助言指導主事からは、学習指導要領解説の中に明記されている、「生徒や学校の実態に応じ、多様な学習活動を組み合わせて、授業を組み立てていくことが重要であり、単元のまとまりを見通した学習を行うに当たり、基礎となる知識及び技能の習得に課題が見られる場合には、それを身に付けるため、生徒の主体性を引き出すなどの工夫を重ね、確実な習得を図ることが必要である。」という一部が紹介された。提案者はこの解説にある通り「生徒の実態を十分に把握し行う」ということを今まさに取り組んでいる。

また、プチラウンドシステムはスポーツに類似している。子どもはすぐに試合（アウトプット活動）をしたがるが、やってできないと分かった時、基礎となる練習（インプット作業）をする。つまり、アウトプットをするまでには日々のポートフォリオに基づいた自由進度学習が重要であり、子ども達にはそれを理解させながら授業を進めていくことが大切である。同時に、このプチラウンドシステムを授業者のみならず、学校全体の取り組みとして浸透させていくことが大切である。

最後に、提案者が考えている今後の展望（これらのタスクを学び方の一つとして捉えさせていく）についても触れ、学校とは、勉強をするために来るのはもちろんのこと、それだけではなく、「勉強の仕方を勉強しに来るためにある」と理解させ、今後の学習活動に繋げていくことが大切であるとまとめた。